ヤマを見守った一本の古木がある。正蓮寺の大イチョウ。推定樹齢は200年を超える。台風の枝落ちで樹形が変わったものの、風土を年輪に刻んだ風格をにじませている。かつて方城の人々は言った。「大非常のすべてを知っとるのは、あのイチョウだけやろう」と。そして今年5月、その境内に、道をはさんである「伊方古墳」をかたどった「無縁仏塚」が建立された。正蓮寺の長川良顕住職が、大非常や強制連行で失われた名もない多くの遺骨をここで供養している。

第三章

# 大非常そして今の日常

**大非常が起きたあの日から、あと数年で100年が経とうとしている。**
**日本最大の炭鉱爆発事故は、移りゆく時とともに深い沈黙の底に埋もれてしまった。**
**しかし、真実を知り、心にとどめられる人がいるかぎり、命の重さとともに大非常は浮かび上がる。**

日だまりの**路地に響いた** あの子の声は消えた…。
閉山からお**よそ40**年。人は去り、ヤマも消え、
もう、古い写真と**言葉でし**か伝えられない。
この町にしかない**日常に語**りかけるメッセージ。
いまここで、ヤマの声を受けとめたい。

方城の炭鉱長屋の路地で「ゴム跳び」をして遊ぶ子どもたち。今では長屋も姿を消し、近隣のつながりも炭鉱の面影さえも消えつつある。

謎を追った人

方城随想
ヒロシマへと連なるボタ山。

# 織井青吾がみた「悲常」

「わたしは運命的に方城と出会った」という織井青吾さん。およそ5年の歳月をかけて28年前に「方城大非常」を執筆した。遺族や当時を知る人のもとにくまなく足を運び、声をつづった。

「わたしは、広島に落とされた原子爆弾でかなりの火傷を負っている。毎年8月6日がやってくるたびに、生き残りの一人として、死んでいった友や多くの人々にかわって自分がなすべき途を考えつづけてきた。方城非常との出会いが、そこにあったといってもいい」。

昭和54年に発行された「方城大非常」の著者、織井青吾さん。はじめて訪れた筑豊には、まだボタ山が**墓標のよ**うに立っていました。方城町**に足を踏**みいれたのは昭和49年5月**1日、織井**さんのメモ帳にそう記されて**いました。**

「古老から方城大非常の**話を聞い**て当時の資料などをめくっているうちに、とんでもない事故だと思いはじめた。**爆発原因がぼか**されていてはっきりし**ない。どの資料も**死亡した坑内馬の数**は合っているが**、人間の数はバラバラ。これが、わたしにとって方城非常追跡の出発点となった」。

そして織井さんを大非常の執筆へと駆り立てたのは、生まれ故郷「広島」とのつながりでした。

「方城大非常の犠牲者にみられる広島県出身者**は全体の**10%弱、孤児は20人もいた。**原爆で多**くの孤児が出たが、その40年近くも前に出稼ぎの炭鉱孤児がいた。この地では坑夫になることを軍隊用語の『志願』という言葉でよんだが、ボタ山がヒロシマに連なっているように思えてならなかった」。

織井さんが方城大非常の取材で、広島県の山間を訪ねたときのことです。

「大非常の犠牲者とその友人の実家は、両家とも小作農家で2百メートルしか離れていなかった。わ**が国全体**からみれば、針でつついた**ほどの地点**。そのなかで5人が炭鉱に出**稼ぎに**行って2人が死亡、さらに原爆で4人、戦死が2人、そのうえ自殺が2人と、あわせて10人の命が奪われていた。そうした史実を近**くで生まれ**育っていながら、同じよう**な境遇にあ**る自分が知らずに生きてきた。**はずか**しかった」。

昭和53年12月15日、**織井さん**の取材活動が思わぬ形で方**城に現れ**ました。大非常の時刻にあわせ、役場が哀悼のサイレンをならしたのです。大非常から数えて64年**目のことでした。福**智山から吹き下ろす**寒風の中、織井**さんは痛いほどヒロ**シマの夏を感じたとい**います。

「『方城大非常』**を出版してひ**とつ心残りがある。**広島と筑豊が教**えてくれた人々の悲しみ。炭鉱では『非常』、戦争では『非常時』という言葉で命が失われた。できれば『非情』、『悲常』という言葉でタイトルにし**たかった**」。織井さんが、二つの故郷を**ふり返り**ました。

織井青吾（おりい・せいご）1931年広島市に生まれる。広島高師附属中学3年のときに原爆被災。シナリオ、ルポルタージュ、小説、評論などを執筆。「地図のない山」「方城大非常」「流民の果て」「なぞの方城炭坑大爆発」など著書多数。早大中退、明大卒。東京都国立市在住。